

熊本八代方言から日本語を見る*

—主格の「が」・「の」をめぐって—

吉村 紀子

静岡県立大学

本論は日本語において共通語だけでは理解できない問題を解く手がかりとして方言研究の知識を適用する試みである。考察では、主格表示の「が」と「の」について、特に「が/の」の交替に焦点を絞り、Harada (1971)の議論に熊本八代方言の事実を交流させつつ、最近の「主語移動説」に対して「基底生成説」を再考する。この方言は大主語に「が」を、叙述主語に「の」を区別して用いるため、「が/の」の交替に新たな見解をもたらすことになる。分析から、第一に、主文は「NP-の」の「NP-が」を越える移動が許容しないのに対し、関係節は「NP-の NP-が」の語順が可能であること、第二に、関係節の主語の位置に再叙代名詞が生起できること、が明らかになる。その結果、問題の「NP-の」はDPの指定部に基底生成されたNPに属格の「の」が付与されたもので、埋め込み節の主語はゼロ代名詞の *pro* であることを主張する。したがって、「が/の」の交替は *pro-drop* 現象に係わる事実として捉えることができよう。このような成果を踏まえ、統語理論と方言研究との交流の必要性和重要性を強調する。

1. はじめに

1.1 方言研究と統語理論

日本語の統語論研究において、方言の言語現象を研究の対象にすることはこれまでほとんどおこなわれていない。しかし、統語の本質を捉えようとするとき、方言研究が共通語の事実だけでは解決が困難な問題に

*本稿は、2006年2月11日・12日に開催された神田外語大学・言語科学研究センター(CLS)・公開ワークショップ『日本語の主文現象と統語理論』において発表した「熊本八代方言から日本語をみる—「ノ」・「ト」・「イ」をめぐって—」の一部、「ノ」について加筆し、発展させたものである。他については、稿を改めることにする。発表の機会を設けていただいたCLSの井上和子先生、長谷川信子先生、山田昌史氏、また当日コメントや質問をいただいた参加者に感謝する。

ついて理解の手がかりを示すことができる場合がある。

たとえば、Radford (1997: 134) は、ベルファースト地方で話されている方言の事実 (1) から現代英語の CP 構造 (2) が実証できると述べている。

(1) a. I wonder [**which dish that** they picked]

b. They didn't know [**which model that** we had discussed].

(Henry 1995: 107 (27) (28))

(2) [CP[C' [SPEC *wh*][C]]]

また、吉村・仁科 (1994) は、熊本八代方言¹からの事実 (3) に基き、共通語の分裂文に現れる「の節」の「の」は代名詞と補文標識の二重範疇 (4) であり得ると分析した。²

(3) a. [[ニューヨークで観戦した]ツ/ト]はヤンキース戦だったバイ。

b. [[ニューヨークで観戦した]*ツ/ト]は[ヤンキース戦バ]だったバイ。

(吉村・仁科 2004: 65 (28a) & (29a))

(4) a. [DP [IP …pro_i…V] [D の]_i]

b. [CP OP_i [C' [IP …t_i…V] [C の]]] (吉村・仁科 2004: 70 (34))

この考察では、熊本八代方言の二つの特徴—第一に、この方言が「の」ではなく、[D ツ]と[C ト]を区別して使用すること、第二に、焦点の名詞句が格助詞 ((3b) の目的格「バ」) や後置詞を伴う場合、「ト」のみが可能であること—が貴重な証拠となったのである。³

1.2 目的

本稿では、共通語の問題を解く一助として方言研究の知見を利用することをさらに考えてみたい。今回取上げる問題は、主格の「が」と「の」で、特に考察の焦点を「が/の」の交替に絞る。以下の考察は、熊本八

¹ 熊本県南西部地域 (熊本県八代郡宮原町、鏡町、竜北町) において話されている方言。なお、現代共通語と区別するため、以下、熊本八代方言の特徴はカタカナ表示とする。

² (4) は基本的に Hoji (1987) を継承するものである。

³ 「の」の二重範疇性の歴史的発達について、詳細は仁科・吉村 (2005) 参照。

代方言（注 1）からの資料が中心となるが、この方言が主文・従属文の区別なく「ノ」を主格助詞として用いる点から、「が/ の」の交替の問題に対して新たな光を当てることができると思う。

本論の構成は次のようになる。まず、第二節において、熊本八代方言の主格助詞について、歴史的な変遷も視野に入れつつ、概観する。次に、第三節において、「が/ の」の交替に関する Harada (1971, 1976) の観察を熊本八代方言の事実から捉え直してみる。最後に、第四節において、「が/ の」の交替が移動によって生じるという最近の主張に対して、熊本八代方言の複数主語と再叙代名詞の現象から反証を提示する。結論を先取りして述べておくと、「が/ の」の交替によって生じる「の」は基底生成された属格の「の」である。

2. 熊本八代方言の主格助詞

2.1 「東京の物価ノ高か」

熊本八代方言では、共通語と異なり、主文、従属文に関係なく、主格の助詞は一般的に「ノ」である (Yoshimura 1992, 吉村 1994)。⁴

(5) a. 東京の物価ノ高か。

b. 小さか子供ノ（ン）泣きよるバイ。⁵

(5) において、「の」は属格で、「ノ」は主格である。⁶つまり、「東京の物価」「小さか子供」がそれぞれの主文の述語「高か」「泣きよる」の主語である。

また、主格の「ノ」は名詞節においても観察される。

(6) a. 東京の物価ノ高かテ聞いたバイ。

⁴ 九州方言学会の 1964/65 年の調査によれば、たとえば「バスが来た」というような文において、熊本、佐賀、長崎ではノが優勢であった。ただ、福岡県の場合、北部や北九州ではガ、一方、南部の八女・大牟田地域ではノが優勢であった (1969: 98-99)。

⁵ ノはそれに上接する名詞句が母音で終わる場合、ンと発音する人もいる。

⁶ ノは敬意を基本とするという見方があるが、九州方言学会の調査結果では、主格助詞としての性格が老少を通じて強く、ノとガの敬意区別は八分通り失われたと見て良い状態で

b. 小さか子供ノ (ン) 泣きよつトはショーン (しかたが) なか。

テは共通語の「と」に相応する引用の補文標識で、(6a) は that-節を含む例である。一方、トは共通語の「の」に相応する補文標識で、(6b) は ‘it is (adjective) that …’ の構文となっている。(6) からわかるように、名詞節内に現れた主語の格助詞は主文と同じくノである。

また、主格のノは、主語ばかりでなく、目的語にも与えられる。

(7) a. あたは先生の話ノ/*バわかたカ？

b. 印鑑ノ/*バ要るカイ？ (吉村 1994: 21-22 (18a) (19b) (20b))

「先生の話」「印鑑」はそれぞれ述語「わかる」「要る」の目的語である。熊本八代方言でも、共通語と同様に、目的格バは用いず、主格ノが与えられる。

2.2 「東京ガ物価ノ高か」

熊本八代方言では、次のような文において、「ガ」が生じる。

(8) a. 東京ガ物価ノ高か。

b.*東京ノ物価ガ高か。

(8a) を (5a) と比べてみると、文頭の「東京」に与えられた格助詞が前者の場合、属格の「の」であったのに対し、後者の場合、主格のガである。すなわち、(5a) と異なり、(8a) では、「東京」は通常的主語ではなく、大主語⁷ (Kuroda 1988) あるいは焦点の解釈が可能な主語であり、述語「高か」の主語は「物価」である。(8b) では、ノは属格の「の」でなければならず、大主語や焦点の解釈は生じないので、非文法的な文になってしまうのである。^{8,9}

さらに、(9) のパラダイムから、(8) で見た事実、つまり熊本八代方言では大主語の格助詞はガでなければならないことが確認できる。

あると結論付けている (1969: 233)。

⁷ あるいは、久野 (1973) の用語を用いると、「総記」。

⁸ 熊本八代方言における「ガ」の用法について、詳細は吉村 (1994) 参照。

⁹ (8b) は、「東京の何が高いの」の「何」に対する答えであれば、文法的な文となる。

(9) a. あそこんウチ**ガ**泥棒ノ入った。

b.*あそこんウチノ泥棒**ガ**入った。

(9a) では、ガに上接する「あそこの家」は焦点として解釈でき、ノの付いた「泥棒」が述語「入った」の主語である。一方(9b)では、文の意味(「泥棒が入ったのはあそこの家」)から考えて、ノは属格の「の」ではあり得ない。つまり、このノは主格の可能性しか残されていないことになる。ところが、文が非文であることから、ノは焦点(あるいは大主語)の名詞句には用いることができないことがわかる。

2.3 まとめ

これまでの観察をまとめると、まず、熊本八代方言では、主文、名詞節を問わず、主語に用いる格助詞は、共通語の「が」と異なり、「ノ」である。次に、大主語や焦点を表わす場合、熊本八代方言も共通語と同様に、主格助詞「ガ」を用いることがわかった。特にここで留意したい点は、大主語・焦点の名詞句に主格助詞の「ノ」が適用できない事実である。

ところで、熊本八代方言において「が」と「ノ」が主格助詞として機能していることは、日本語文法史上における主格助詞の変遷から見れば、それほど驚くことではないようだ。野村(1993a, b)によれば、古代の日本語において、「が」と「の」は両者とも体言に付いて、それを修飾語化する助詞であり、非修飾語と強く一体化する機能を果たしていた。そして、一般的には「の」、代名詞や固有名詞には「が」がそれぞれ用いられていた(金水 1995, 1996, 近藤 2000)。¹⁰しかし、中世末から近世にかけて、「が」が主節内において多用されるようになり、主格助詞として確立して行ったわけであるが(山田 2000)、その結果、共通語では「の」の主格助詞としての役割が消滅して行ったのである。他方、熊本八代方言は、その変遷に追従せず、主格の「の」をそのまま継承して行くこととなり、その過程において、共通語とは反対に、主格の「が」が

¹⁰ (i) a. 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の(能)流れ来るかも(万葉集 822)

b. もみち葉は今はうつろふ我妹子が(我)待たむと言ひし時の経行けば(万葉 3713)

衰退して行ったのではないかと考えられる。^{11,12}

3. 「が/の」の交替

3.1 Harada (1971)の提案

周知のように、共通語では、関係節や「こと節」において主格の「が」が属格の「の」に交替可能である。この格助詞交替の現象が「が/の」の交替 (Harada 1971) と呼ばれているものである。¹³

(10)a. [[太郎が/の読んだ] 本]

b. [[花子が/の試験に合格する] 確率]

c. 多くの人[[事故が/の起こった] こと]を知らなかった。

また、この交替が目的語に与えられた「が」にも起こることも周知の事実である (Harada 1971: 76, 井上 1976: 228)。

(11)a. [[海が/の見える] 家]

b. [[印鑑が/の要る] 書類]

c. [[金メダルが/の欲しかった] 日本]

Harada (1971) は、「が/の交替」の現象について、(12) にあるような変換法則を提案した。¹⁴

(12) a. $X - [NP[S Y - NP - ga - (A) - PRED] - N] - W$

→ b. $X - [NP[S Y - NP - no - (A) - PRED] - N] - W$ (Harada: 85 (27))

¹¹ 以下は森川許六よって 1685 年～ 1713 年の間に読まれた歌とされるものである。この頃から九州方言の特色が顕著になって来たと考えられている (九州方言学会 1969: 608)。

(i) あまたちノじゅったんぼうでどんくとりあらよそわしかおんだいやばい
‘男の子が水たまりで雨蛙を取っているけど、まあきたないこと。わたしはいやだね。’
(香月薫平の遺稿『長崎古事集覧』。九州方言の基礎的研究 (1969: 607) より引用。)

¹² これは主格ノを用いる熊本・長崎・佐賀方言に関して言えることである。ガの衰退は現在も若者の間で進行しているようである (九州方言学会 1969: 98-99)。

¹³ この観察は、浅見 (1956) の指摘—主格「の」が連体句において可—まで遡ることができる。たとえば、Bedell (1972)、Shibatani (1975)、井上 (1976) 参照。

¹⁴ (A) は「が」が上接する NP と述部との間に介在する PP、NP、AdvP 等を表わす。

(12) は、「「が」が「の」に変わる」という直感を単に図式に書き直したような印象を与えるのであるが、古代語に主格助詞として「の」と「が」が存在していた事実から鑑みると、また、次節の議論の中で明らかになってくるように、この見方は問題を考える上で重要な指針である。特に、変換過程において何も移動しないと考える Harada 案に着目したい。

3.2 熊本八代方言の「ノ」

先例において見たように、熊本八代方言は主文の主語に「ノ」が現れ、また、名詞節の主語に「ノ」が生じる。したがって、共通語のように、関係節や「こと節」において「が/の交替」はないと考えられるのである。

15

そこで、ここでは、共通語において「が/の」の交替に容認度のゆれが見られる例をながめてみることにしよう。Harada (1971) は、「の」と述語の間に何か ((12)の(A)) が介在する場合¹⁶、また、「こと節」の場合、容認度が下がると報告している。たとえば、以下がそのような例である。

(13)a. ^(*)芽のなかなか出ない桜の木。 (Harada 1971: 79 (14))

b. *太郎の花子に貸した本。 (井上 1976: 229 (21))

(14) *誰もが次郎のウソをついていることを知っている。

(Harada 1976: 348 (10))

(13) は関係節の例で、副詞「なかなか」が介在する (13a) より、間接目的語「花子に」が介在する (13b) が容認度が低い(注 16)。(14) は問題の交替が「こと節」内で生じている例であるが、その容認度は (13) より低いと判断される。¹⁷

¹⁵ 長谷川 (1995) は、現代共通語の「の」の議論の中で、熊本方言のこの問題について、「主格ノ/属格ノ」の交替ではないかと述べている (68: 注 1)。この点については次節でふれたい。

¹⁶ その介在詞の名詞性が高ければ高いほど、その容認度は低くなる傾向にあるとされる (Harada 1976: 357 (30))。

¹⁷ ただし、井上 (1976) は (14) のような例についてまったく問題ないと判断する (228 (12))。

他方、熊本八代方言では、これらはまったく問題のない文である。

(15)a. [芽ノ[なかなか出ん] 桜ん木]

b. [太郎ノ[花子に貸した] 本]

(16) 誰もン[次郎ノ/ンうそバついトルこと]バシトッル。

(16) は主文と名詞節の主語にそれぞれ主格の「ノ」が生じている例である。¹⁸

さらに、次のような文もまったく問題のない熊本八代方言である。

(17) a. あたは[[先生ノうそバつかシタ]ト]バ知ットッタトカイ？

b. [[じいさんノ中国の友達からもらワシタ] 中国茶]。

(17a) は「こと節」を含む例であるが、節内の主語「先生」にノが生じる。(17b) は関係節内において「じいさん」と述語の間に PP「中国の友達から」が介在するのにもかかわらず、問題のない文である。このように、共通語において「が/の」の交替が容認し難い「こと節」や PP の介在例においても、熊本八代方言ではノが適用できる。

3.3 主格助詞「ガ」・「ノ」

ここまで見てきたように、熊本八代方言の二つの主格助詞の用法には違いがある—すなわち、大主語にガを、そして述語の主語（以降、叙述主語と称す）にノをそれぞれ用いる。

それでは、NP-ノが NP-ガを越えて文頭に移動できるだろうか。

(18)a. 東京**ガ**物価ノ高か。

b. *物価ノ東京**ガ**高か。

(18a) から「物価ノ」を文頭に移動した結果、(18b) は非文法的な文になっている。この文法性の対比から、叙述主語が大主語を越えて移動

¹⁸ この例文は、Shibatani (1975) の制約 NP-no-NP に違反しているにもかかわらず、熊本八代方言ではまったく問題がない文である。少し補足すると、現代共通語においても、この制約の妥当性が疑問視される例がいくつか指摘されている（井上 1976: 232 (27)）。

できないことがわかる。同様の結果が (19) においても得られる。

(19) a. 日本**ガ**スケート**ガ**金メダルノ取るっバイ。

b. *金メダルノ日本**ガ**スケート**ガ**取るっバイ。

(19) において、叙述主語「金メダル」を文頭に移動すると、文法的な文でなくなってしまう。

以上、(18-19) で見たように、NP-ノは NP-ガの前に移動できない。つまり、熊本八代方言では、二つの主語の語順は主文において[NP-ガ NP-ノ]でなければならないのである。

(20)a. [_{IP} NP-ガ [_{IP} NP-ノ……V]] (18a) & (19a)

b. *_{IP}NP_i-ノ [_{IP} NP-ガ[_{IP} t_i……V]] (18b) & (19b)

4. 「が/の」の交替は本当に移動か

最近の研究では、「が/ の」の交替について、問題の「の」が DP の指定部に生じる「の」であるという根拠を挙げ、また、統語理論における素性一致という概念を取り入れ、この「の」に上接する名詞句は関係節や「こと節」の中から抜き出されて DP の指定部へ移動したものであるという分析 (Miyagawa 1993, Watanabe 1996, 渡辺 2000, Ochi 2001) が出てきた。本節では、これまでの点を踏まえて、この「が/の交替」の移動説について、熊本八代方言の事実から新たな光を当て、再検討する。

4.1 関係節と主語の移動

次の例文は、前出の (18) とは対称的に、両文とも文法的な文である。

(21) a. [_{DP} [東京**ガ**物価ノ高か] 理由]

b. [_{DP} 物価ノ[東京**ガ**高か] 理由]

特に、(21b) では、叙述主語が大主語の前に生じた構造 (20b) であるため、非文法的な結果が予測される。にも関わらず、この関係節は文法的なものである。つまり、主文の (18b) とは異なり、関係節では“叙述

主語”（「物価」）が大主語（「東京」）の前に来ることが許容されるのである。^{19,20}

(22) においても、類似した結果が得られる。

(22) a. [DP [日本ガ金メダルノ取るっ] 種目]

b. [DP 金メダルノ [日本ガ取るっ] 種目]

再び、(22b) では、大主語「日本」の前に“叙述主語”「金メダル」が生じているのであるが、(19b) とは対称的に、結果は文法的である。

以上のことをまとめると、次の通りである。

(23) a. [DP NP-ガ [IP NP-ノ……V] NP] (21a) & (22a)

b. [DP NP-ノ [IP NP-ガ……V] NP] (21b) & (22b)

ここで着目したい点は (20b) と (23b) の対比についてである。すなわち、主文では許容できない[NP-ノ NP-ガ]の語順が関係節では可能であるという事実である。このことは、(20b) で起こった移動が (23b) では生じていないことを示唆するものではないか。

(24) 熊本八代方言において、[NP-ノ NP-ガ]は移動によって派生したものではない。

さて、(24) を前提にする場合、第一に、(23b) の「NP-ノ」は基底生成であるのかどうか、第二に、「NP-ガ」が関係節の述語の主語となり得るのかどうか、という二つの疑問が生じてくる。まず、後者の問題から取り上げることにしよう。以下はガをノに変換する実験である。

(25) a. * [DP 物価ノ [東京ノ高か] 理由]

b. * [DP 金メダルノ [日本ノ取るっ] 種目]

興味深いことに、(25) は両者とも非文法的文になってしまう。

¹⁹ このような例文は、NP-ガの「ガ」に強勢を与え、その後少しポーズを置くと、「焦点」の解釈ができる。ただし、記載上煩雑になるので、ここでは「大主語」に限定する。

²⁰ “叙述主語”は本当に叙述主語であるかどうかについての議論は4.3まで先送りにする。

さらに、他の文も調べてみても、同じ結果である。

- (26) a. [DP 富士山^ガ [残り雪^ノ きれいか] 季節]
b. [DP 残り雪^ノ [富士山^ガ きれいか] 季節]
c. * [DP 残り雪^ノ [富士山^ノ きれいか] 季節]

“叙述主語”「残り雪」が大主語「富士山」の前に来ている例(26b)において、ガをノに変換すると、非文法的な結果(26c)である。

以上、見てわかるように、「NP-ガ」は「NP-ノ」に変換できない。この事実から、次の二点が明らかになってくる。第一は、ガに上接する名詞が叙述主語にはなり得ないこと、第二は、関係節内には見えない叙述主語が存在すること、である。²¹そこで、(23b)に対し、以下のような構造を考えてみる。

- (27) [DP NP_i-ノ [IP NP-ガ [pro_i……V] 理由・種目・季節]]

すなわち、見えない叙述主語に基底生成の pro を想定する提案である。²²

4.2 空範疇—ゼロ代名詞と痕跡

次に、第二の問題—「NP-ノ」は基底生成であるかどうか—について考えることとする。日本語において、空範疇が基底生成の pro であるのか、あるいは移動によって生じた痕跡であるのかを実証的に調べる方法として、顕在的な再叙代名詞の有無のテストが挙げられる。

たとえば、(28)にあるような対比を考えてみよう。

- (28) a. 太郎_iは花子が次郎が pro_i/彼_iに電話すると思っていた。
b. *太郎_iに花子が次郎が t_i/彼_iに電話すると思っていた。

両文とも「太郎」と同一指標を持つ「彼」を含む例である。しかし、(28a)は文法的な文であるのに対し、(28b)は非文法的な文となっている。この対比について、次のように説明することができる。(28a)の「太郎」

²¹ これらは、主格助詞「ガ」の熊本八代方言での役割を考えると、当然の結果だと言える。

²² Sakai (1994: 187 (27-28)) では、(27) を一つの可能性として検討したが、「が/の」の交替は移動によって生じるとする仮説を選択した。

は文頭に基底生成された主題である。他方、(28b)の「太郎に」はかき混ぜ操作によって文頭に移動した目的語である。そしてこの違いは、Saito (1985)の提案(29)に従うと、(28a)は主題文であるので、再叙代名詞が可能であるが、(28b)はかき混ぜ文であるので、「太郎に」の移動元に痕跡が残り、再叙代名詞は生じない、という結果になる。

(29) 主題文は、かき混ぜ文と異なり、再叙代名詞を容認する。

(Saito 1985: 325 (65))²³

つまり、移動が起こった場合、その痕跡と再叙代名詞は共起できないというのである。²⁴

4.3 再叙代名詞—熊本八代方言

それでは、先例に戻り、(27)の構造に実際に再叙代名詞が生起できるかどうかを調べてみよう。

(30) a. [DP 物価_i / [東京 ガそれ_i / 高か] 理由] (21b)

b. [DP 残り雪_i / [富士山 ガそれ_i / きれいか] 季節] (26b)

(30)は、関係節²⁵の叙述主語の位置に、文頭の「NP-ノ」のNPと同一指標を持つ代名詞「それ」が現れた、文法的な例である。この「それ」は、それぞれが「物価」「残り雪」でなければならないこと、且つ、それぞれの叙述主語として解釈できること、から再叙代名詞であると判断される。

さらに、他の代名詞、たとえば「そこ」が普通の関係節において再叙的用法が可能である。

(31) a. [DP [鏡町_i / [IP 毎年 そこ_i / pro_j 生産する] うまかイチゴ_j]

b. [DP [トヨタ_i / [IP GM 用に そこ_i / pro_j 開発した] 新しかエンジン_j]

これらは、まったく問題のない関係節で、(31)からわかるように、「そ

²³ 'Topicalization, but not scrambling, allows a resumptive pronoun.'の筆者訳。

²⁴ 日本語の再叙代名詞の詳細については、Hoji (1987)・Hoji (2002)参照のこと。

²⁵ 言うまでも無く、(30)はいわゆる“先行詞のない”関係節の例である。

こ」は「生産する」「開発した」の主語で、それぞれ「鏡町」「トヨタ」と解釈されなければならない。

4.4 再叙代名詞の可能性—現代共通語

それでは、このような再叙代名詞が共通語の「が/の」の交替の環境において可能であるかどうか調べてみる。

(32) a.^(?)[太郎_iの[やっと (彼_iが) 書き上げた] 論文]

b.^(?)[花子_iの[今年 (彼女_iが) 大学に合格する] 確率]

関係節内の「彼」「彼女」は、「が」から「の」へ交替した NP の「太郎」「花子」と同一人物であり、それぞれの述語の主語となっている。²⁶

同様に、(33) は代名詞「それ」を用いた例文である。

(33) a.^(?)[芽_iの[なかなか (それ_iが) 出ない] 桜の木]

b.^(?)[海_iの[(それ_iが) 頂上から見える] 丘]

これらは、「それ」が文頭の「芽」「海」と一致する再叙代名詞で、関係節の述語「出ない」「見える」の主語となっている。

最後に、再叙代名詞「そこ」の用法について見てみよう。

(34) a.^(?)[マイクロソフト社_iの[今年の秋に (そこ_iが) 売り出す]

新しいソフト]

b.^(?)[東京_iの[オリンピック開催地に (そこ_iが) 名乗り出た]

本当の理由]

(34) もほとんど問題のない例である。「そこ」は「マイクロソフト社」「東京」を意味し、「売り出す」「名乗り出た」の主語となっている。

4.5 まとめ

以上、例文 (30-34) で見たことをまとめると、熊本八代方言と共通語の両言語において、(27) の構造に再叙代名詞（「かれ」「それ」「そ

²⁶ (32a) は、「彼」が「太郎」でない解釈、つまり「誰か他の人が太郎の論文を書き上げた」という解釈も可能であるが、この場合、「彼」は再叙代名詞ではない。

こ」) が可能であることがわかった。この事実は、問題の見えない主語 ((7) や (11) の場合、目的語) が移動の痕跡ではなく、基底生成の *pro* であることを支持する証拠となる。

したがって、(35) に示すように、「が/の」の交替は移動によって起こるのではなく、NP が DP の指定部に基底生成し、それに属格の「の」が与えられたものである、という見方に至った。

(35) [DP NP_i-の [IP *pro*_i/t_i ……V] NP]]

この *pro* 説は、Harada (1976) が (36) について述べたことを再解釈したものだと考えることができよう。

(36) [田中の [田中が青木にやった] 最後の手紙] Harada (350: (19))

二番目の「田中」は ‘Equi NP Deletion’ によって削除されてしまう。²⁷

5. おわりに

本稿では、主格助詞「が」と「の」について、共通語と熊本八代方言の現象を照らし合わせながら、日本語の本質の一端を捉えようとした。その目的は、共通語だけでは理解できない問題を解決するの一つの手がかりとして、方言研究の適用を試みることにあった。特に、今回の考察では、「が/の」の交替に関連する問題に焦点を絞り、Harada (1971) の観察に熊本八代方言の事実を交流させながら、最近の「主語移動説」に対し、「基底生成説」を再訪した。

まず、熊本八代方言において、主文では叙述主語「NP-ノ」が大主語「NP-ガ」を越えて文頭に移動できないことを示した。次に、関係節では「NP-ノ」が「NP-ガ」の前に位置することができるが、この場合、両主語は述語の主語ではないので、節内に別の主語が必要であることを論じた。続いて、その主語にゼロ代名詞 *pro* を想定し、果たして再叙代名詞が可能であるかどうかを方言と共通語の両言語において検証した。そ

²⁷ 熊本八代方言の場合、「ノ」は属格の「ノ」であるとする方がよい (注 15 参照)。

の結果、再叙代名詞が可能であることが立証できた。

結論として、「が/の」の交替は移動によって起こるのではなく、(35)のような構造をもつのではないかという理解を示した。

(35) [_{DP} NP_i-の [_{IP} pro_i/^{*}t_i ……V] NP]]

つまり、交替で派生したかのように見える「NP-の」は、実は、DPの指定部に基底生成されたNPに属格の「の」が与えられたものである、という見方である。このように、日本語に特有な「が/の」の交替は、pro-drop現象の一環として理解できよう。

今回の議論では、共通語の現象に熊本八代方言からの事実が係わってきたことで、文構造の問題に新たな見解が加わった。このような統語理論と方言研究の交流をさらに促進することの必要性和重要性を強調しておきたい。

引用文献

- 秋山正次. 1979. 『肥後の方言』 桜楓社.
- 浅見徹. 1956. 「の」の歴史—その一として「上代」— 『国語国文』25 卷 8 号. 1-18.
- 原田信一. 1971. “Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese” 『言語研究』 60 号. 25-38.
- 原田信一. 1976. “Ga-No Conversion Revisited—A Reply to Shibatani” 『言語研究』 70 号. 23-38.
- 長谷川信子. 1995. 「の」のシンタックス—ミニマリスト・プログラムの立場から— 『言語』 24 卷 11 号. 62-69.
- Henry, Alison. 1995. *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and*
- Hoji, Hajime. 1985. *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Hoji, Hajime. 1987. “Japanese Clefts and Reconstruction/Chain Binding Effects,” paper presented at WCCFL VI, University of Arizona.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 上』 大修館書店.

- 石垣謙二.1955.『助詞の歴史的研究』 岩波書店.
- 金水敏.1995.「日本語史から見た助詞」『言語』24 卷 11 号.78-84.
- 金水敏.1996.「歴史的に見た「格助詞」の機能」日本認知科学会第 13 回大会
発表資料.
- 国立国語研究所. 1989.『方言文法全国地図』 第 1 集.
- 近藤泰弘.2000.『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of Japanese Language*, Cambridge, Mass: The
MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. 1988. “Whether we agree or not: a comparative syntax of English and
Japanese,” *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- 九州方言学会. 1969.『九州方言の基礎的研究』 風間書房.
- Miyagawa, Shigeru. 1993. “Case-Checking and Minimal Link Condition,” in *MIT
Working Papers in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II*, ed.
Phillips, Cambridge, Mass: MITWPL, 213-254.
- 仁科明・吉村紀子.2005.「補文標識の出現—「の」の歴史的変化—」『国際
関係・比較文化研究』 第 3 卷 第 2 号. 静岡県立大学.75-89.
- 野村剛史.1993a, b.「上代語のノとガについて (上) (下)」『国語国文』62 卷
2 号.1-17, 62 卷 3 号.30-49.
- Ochi, Masao. 2001. “Move F and Ga/No Conversion in Japanese,” *Journal of East
Asian Linguistics* 10, 247-286.
- Radford, Andrew. 1997. *Syntax: A Minimalist Introduction*, Cambridge University
Press.
- Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical
Implications*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Sakai, Hiromu. 1994. “Complex NP Constraint and Case-Conversions in Japanese,” in
Nakamura ed. *Current Topics in English and Japanese*, Tokyo: Hituzi Shobo.
- Shibatani, Masayoshi. 1975. “Perceptual Strategies and the Phenomenon of Particle
Conversion in Japanese,” in Crossman et al. eds., *Papers from the Parasession
on Functionalism*, Chicago Linguistic Society, 469-480.
- Watanabe, Akira.1996. “Nominative-Genitive Conversion and Agreement in

- Japanese: A Cross-Linguistic Perspective,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.
- 渡辺 明. 2000. 「原田論文の遺産を継承する—主格の「が」・「の」を中心に」
福井直樹（編）『シンタクスと意味—原田信一言語学論文選集』大修館.
- 山田昌裕. 2000. 「主格助詞「ガ」の勢力拡大の様相—原拠本『平家物語』と『天
草版平家物語』との比較」『国語学』51 巻1号.1-14.
- Yoshimura, Noriko. 1992. *Scrambling and Anaphora in Japanese*, Ph.D. dissertation,
University of Southern California, distributed by GSIL Publications.
- 吉村紀子. 1994. 「「が」の問題」『変容する言語文化研究』静岡県立大学.13-28.
- 吉村紀子・仁科明. 2004. 「分裂文の意味と構造」『ことばと文化』第7号, 静岡
県立大学.55-72.

422-8526

静岡市駿河区谷田 52-1

静岡県立大学

国際関係学部

yoshimun@u-shizuoka-ken.ac.jp